

THE CRUELEST MILES ユーコンの疾走

極北の町を救え! 犬と人の感動実話

ゲイ・ソールズベリー/レニー・ソールズベリー

山本光伸 | 訳 |



光文社文庫

[訳者略歴] 1941年東京生まれ。国際基督教大学卒。翻訳家。訳書に、
R・ラドラム「暗殺者」、D・リンジー「黒幕は闇に沈む」、P・マース
「アンダーボス」、B・グリーン「DUTY」など多数。



光文社文庫

ユーコンの疾走 ^{しつそう} 極北の町を教え！ ^{きよくほく まち すく} 犬と人の感動実話 ^{いぬ ひと かんどうじつ わ}

著 者 ゲイ・ソールズベリー レニー・ソールズベリー
訳 者 ^{やま もと みつ のぶ} 山 本 光 伸

2005年9月20日 初版1刷発行

発行者 篠 原 睦 子
印 刷 堀 内 印 刷
製 本 フ ォ ー ネ ッ ト 社

発行所 株式会社 光 文 社

〒112-8011 東京都文京区音羽 1-16-6

電話 (03)5395-8149 編集部

8114 販売部

8125 業務部

© Gay Salisbury Laney Salisbury 2005
© Mitsunobu Yamamoto

落丁本・乱丁本は業務部にご連絡くだされば、お取替えいたします。

ISBN4-334-76159-3 Printed in Japan

[R]本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作
権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望さ
れる場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

元又上又庫

The Cruellest Miles

ユーコンの疾走

極北の町を救え! 犬と人の感動実話

ゲイ・ソールズベリー
レニー・ソールズベリー
山本光伸 訳



光 文 社

THE CRUELEST MILES

by

Gay Salisbury & Laney Salisbury

Copyright © 2003 by Gay Salisbury & Laney Salisbury

Japanese translation rights arranged with

W. W. Norton & Company, Inc.

through Japan UNI Agency, Inc., Tokyo.

ドロシー・ブースへ捧ぐ

『ユーコンの疾走』——目次

プロローグ 氷に閉ざされて……………13

1 金、男たち、犬たち……………25

2 大発生……………55

3 隔離……………73

4 犬橇レースへ……………91

5 空飛ぶ機械……………121

6 北方の猟師たち……………167

7	四〇度の掟	203
---	-------	-----

8	ユーコン川に行く	225
---	----------	-----

9	お役所仕事	251
---	-------	-----

10	氷の工場	287
----	------	-----

11	嵐の中の栄光	313
----	--------	-----

12	救出	333
----	----	-----

	エピソード トレイルの終わりに	355
--	-----------------	-----

	補遺 A B	379
--	--------	-----

	著者覚え書き 謝辞	391
--	-----------	-----

	訳者あとがき	402
--	--------	-----



シベリア

北極海

北極圏

アラスカ

ベーリング海峡

スワード半島

ノートン湾

ユーコン川

アイデイトロッド

ベーリング海

アリューシャン列島

北太平洋







〈1925年血清ルート〉

アラスカの歴史研究に時間を費やす者は、いつも人間の傍らにいる犬こそが、この地方の過去および現在における発展の最も重要な要因であることを知るのだ。

——一九〇三年、アラスカ判事ジェームズ・ウィツカーシャム

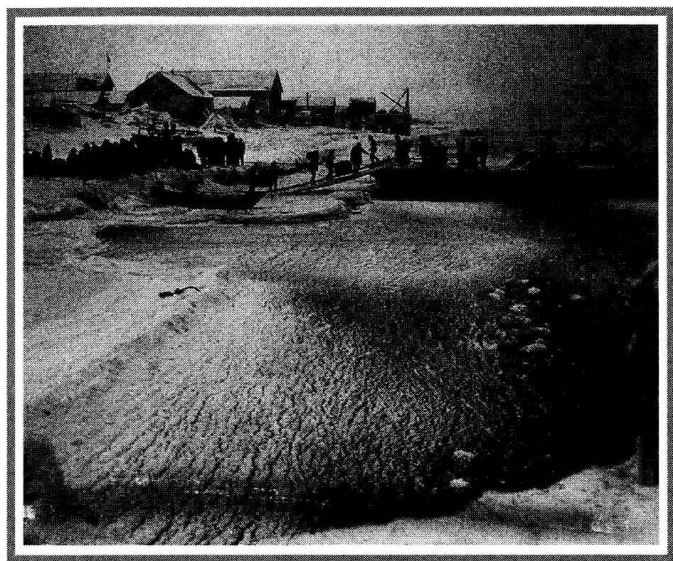
退路はなく、後戻りすることも、同じ地を二度踏破することもなかった。

——フリティヨフ・ナンセン、自らの遠征隊に「前進」を意味する「前進」という名をつけた際に

アラスカでは……人々の全生活が犬と関わり合っていて……北極地方の支柱は犬の背骨^{バックボーン}なのだ。

——一九三五年八月、アラスカで飛行機墜落事故に遭い、機内から奇跡的に救出された、ウィル・ロジャーズの最後のコラム

ユーコンの疾走



町が完全に氷に囲まれ、7カ月間閉じ込められる前にノームを出る最後の船に、乗客たちが乗り込む。(写真提供テレンス・コール)

プロローグ—氷に閉ざされて

われわれは、氷と雪の監獄の中にいる。最後に去った船が戻ってくるとはとても思えない。この小さな共同体は嵐と、暗闇と、肌を刺すような冷氣とともに取り残され、いまや頼りにできるのは自分たちだけとなった。

——ノーム編年史

カーティス・ウェルチは、ベーリング海沿岸の数百マイルにわたる、この忘れ去られた地域の唯一の医師だった。過去一八年間、極北の地の習いとして、冬は突然到来した。この土地には二つの季節しかないと言われていた。冬、そして独立記念日。

ノームでは、冬季は短くても七カ月に及び、もう一つの季節はわずか数週間である。七月から一〇月まで、ベーリング海は氷から解放され、南へ約二四〇〇マイル（約三八〇〇キロメートル）、航行日数一四日ほどの距離にあるシアトルを出た蒸気船や帆船が町を訪れる。大きな港となると、シアトルがいちばん近いのだ。一月初旬にはベーリング海は一面凍りつき、翌年の春まで溶けない。空から光が射すことはほとんどなかった。春に最初にやって来て秋に最後に

去る客船はたいていヴィクトリア号で、この船が積荷を降ろして南へ発つと、町は一つのルート¹をのぞいて外界から遮断されてしまう。アラスカ内陸部を経由してノームを南東の不凍港と結ぶのは、犬櫓^{いぬざり}コースだけだった。

容赦ない寒さが唐突に襲いかかってくる。ブリザードが数日間続き、どんなに強靱^{きやうじん}な精神の持ち主でも判断力を失ってしまうほどの、極限に近い孤立をもたらす。毎年秋になると、人口のほぼ半分の人々が最後の船でノームを離れ、春まで帰らないのだ。

それでもなお、ウェルチは町にとどまった。第一次世界大戦中の短期間、アメリカ本国の医師として働いたときをのぞいて、毎年それを選んだ。一九〇七年にこの地を踏んで以来、彼はアラスカに惚^ほれ込み、年月を経て、その思いは強くなっていた。コネチカット州ニューヘーヴンの故郷にいる妹宛の手紙には、この雄大な自然の中にと精神を解き放つことができる、と書かれていた。

幼いころから他者との距離感を意識していたウェルチは、長じてもなお、社交的なことは億劫^{おつこう}に感じる一方で——パーティーでは、おしゃべりが始まったとたんに帰ってしまうほどだった——、アラスカの限らない大空間を、天からの贈り物のように思っていた。ようやくわたし自身を見つけることができたんだ、と彼は書いている。

五〇歳。輝くような金髪は白く染まり、くしゃくしゃだった。ウェルチは、年に一度の町の大移動、そして孤独の訪れを待ち焦^こがれていた。

季節を問わず、ノームは遠隔の地であり、ほぼ六〇万平方マイル（一五五万平方キロメートル）——イングリンド、フランス、イタリア、スペインを併せた面積と同じ——に及ぶアラスカの広大な土地、アメリカ最後のフロンティアの地図上の一片なのだ。アラスカの南東側の端には、ジュノーという都市と年中凍結しない港がある。その反対側の北西端にノームは位置する。

アラスカの風土について語られることに誇張はない。西側では、でこぼこの北太平洋沿岸部に活火山郡が噴煙を漂^{ただよ}わせ、東へ行くと、ロードアイランド州と同じ広さの氷河がフィヨルドの上までせり出している。内陸部、この準州の真ん中では、北米の最高峰マッキンリー山が雲の上まで延び、果てしなく続く森林地帯を見下ろしている。一九〇〇年代の初め、ある旅行者はこう言った。アラスカのことを充分に知りたいと思い、四つの気^{クライマティック・ゾーン}候地帯を持つ地域の季節の移り変わりを目に留め、凍りついた海の上を吹き抜ける寒風の匂いをかぎたいなら、一生をこの地で過ごさなければならぬだろう。そしておそらく、生涯の終わりによりやくノームにたどり着くのだ。

一九二〇年代初頭、ノームは北米で最も北西にある町だった。かつてはゴールドラッシュに沸き返ったが、当時の面影はもうない。北極圏から南へ二度、ベーリング海に二〇〇マイル突き出した、風の吹きすさぶスワード半島の南岸に位置している。州内の他の主要都市よりシベリアのほうが距離的に近いし、少し北へ行くと、嵐が頻発し霧の立ちこめるこの界限が珍しく晴天になったときには、ロシアへと続くベーリング海峡が五五マイル先に見える。